

COSMOS集



三千のクッキー型よりみつけたたり空の近くの雪の結晶スノウフレイク

生後六十三年目 高橋美羽子 神奈川

生物部なりし友人は虫好きで変人ならむ我と別種の

この世に生まれ途方にくれてゐるやうな歳末生後六十三年目
年末の日曜道端の猫なで今年も終はるよい天気だね
家族なく何するといふにあらざれど酒と餅買ひ新年を待つ
ツリーの後門松も取れし入口に日常の風マフラーを巻く

柚 子 谷 真 樹* 神奈川

小田部 雅子選 「あすなる集」特選

雪かきサンバ 白木佳乃*青森

足腰を奮い立たせて四時起きの雪かきサンバ一糸乱れず
雪山が屋根より高くなる窓に林檎埋めよう朝陽代わりに
新聞の配達受けて雪かきはラストスパート出勤間近
終わりなき吹雪の夜の救世主JAFに四回助けてもらう
どの家も落雪注意の貼り紙の個性演出ここは筆文字

かつば橋 秋山幸子 千葉

かつば橋に蒸籠を買ひにゆきながら刷毛にパン型お鍋ももむ
かつば橋の菓子道具店に星のごと抜き型タワーがまたたき立てり
かつば橋の「クッキータワー」眺めつつ三千のなかの一つをさがす
店内の抜き型はりつく壁一面見上げ見下ろしひとつを探す

風呂用と言われて連れてこられたがまんまとだまされへがされる柚子
わけもなく愛されていると無防備に信じていたころの照紅葉
噴水の虹はだれにも剝がせない母がわたしにかけた呪いも
わからないわかりたいとも思えない固さをました冬の結び目
枯野にもどうやら雪はふりだしてわたしはしほしほに鉄をにぎる

あ の 朝 前田 亜津子* 神奈川

地震前夜、幾望の月が照らして六甲山から眺めた神戸
あの朝に見た光景は胸のうちに秘めたままに三十年過ぐ
乳飲み子を抱いて歩いた瓦礫の街垂れ下がる電線に触れないように
倒壊したアパートの窓突き破り庭に落ちてた仏壇の姿
潰れてる家の玄関前あたり誰かが置いた運動靴二足

大松 達知選

腹 の 底 清水美里*東京

こんなとこまで来ちゃったと笹舟は嬉しそうにも見えなくはない
どうしたら腹の底からおばさんになれるのだろう体ばかりで
年末も年始もいやだなだらかに続けよたかが月末月初
絶対に外に出ないという覚悟わけのわからん靴下を履く
冬の夜に日傘と電話ボックスが寄り添っている 腕を持たない

配達 バイク 本土和子*東京

陽のさせる窓辺でのぞく鏡にはたしかにありぬ重ねし月日
知らぬ間にすべりて失せし腕時計いすこでわれの時きざめるや
待つ文の無けれどポスト前にきて配達バイクの止まるは嬉し
ティーバッグゆらして姉の話きくわたしの知らぬ父の思い出
ペランダにさす冬の陽のやわらかさ初老の人の情熱に似て

バックル 宮 梓 一*東京

四車線あるバイパスの向こうから午前七時に薫る豚骨
連絡帳アプリにて見る子の顔の膨れっ面がなんてかわい
登園の前にバックル締めるたび小声で言ってしまう「変身！」
一言の否定も口にできぬまま口角ばかり上げる保育士
ジェラートがこし餡になりしばらくは抹茶スイーツ食べなくていい

巻 き 爪 上野 成*新潟

後ろ手に縛られしまま大穴へ蹴落とされ、響く銃声のあり
人骨と瓦礫の上を駆けまわる少年らいずれも頬にぶく痩け
顎をひき歯を食いしばり乗り込みぬ吹雪ける朝の出勤のとき
切れ目なく北からなだれる雪雲の J P C Z うねる列島
我が抱き妻が切りたり肉球に食い込みそうな猫の巻き爪

いいオンナ風 星野尚子*新潟

あたらしいシャンプーの香を漂わせいいオンナ風ドライヤーする
愛犬を亡くしてのちの玄関にぶら下がってるリードが揺れる
真夏には消えて初雪降るころにセブンに戻る雪見だいふく
わたし今日ひよっちゃったと思いい出し酒を飲みたくなる下戸なのに
黒電話リリンと鳴って「高橋でございます」と言う祖母との別れ
福士りか選

曇天の空 柴田有里*愛知

曇天の空とそろいの心持ち内々示出る四月の異動
転々と車道の隅に幾つもの柚子が実りて夜道を照らす
剃き出しの腕と脚とで元氣よく飛び回る子よ外は六度だ
松の内終わればすぐに恵方巻の幟が上がるコンビニの前
雪降るとわくわく笑顔の子らなれど「昼には止む」の予報にがっくり

冬至 十日 三浪 治子 三重

鶯・鴉・鶺鴒・鳩が起こし田に入りてかたみに啄みてをり
寒風のなかの白菊朝なさな緋のいる深め庭に輝く

朝時雨に濡れし小路を急ぎゆく冬至のけさもラジオ体操
夕あかね見送りカーテン閉づるとき冬至十日の庭のあかるさ
氏子らはだれも古い人世間話ぽつぽつとしてご神火護る

キンとカネ 田原 五郎*京都

街並も黙りこくつてたつている午前7時は手もカチ凍る
とおい日の学生集会みるような戒厳令の隣国画像

一枚の絵となり残る過ぎた日々車でぬける大学通り
「金」の字の意味するものはキンとカネ キンは光でカネはその影
ひたすらに目の前のもの食べていた母の食卓ただうまかった

にらみ鯛 高瀬 和子 兵庫

孫たちと原爆資料館へ行くことばが出ない黙して歩む
〈寺町〉は被ばくせし町鉄筋の寺院がならび友が住む町
錦市場で買ひし太つたにらみ鯛かかへて帰る重さがうれし
南禅寺の階段ひとつ踏みはづしころびて痛き新年迎ふ
半月の日めくりいつ気にくる時空つぼの日々がさらさら過ぎる

山茶花に雪 戸田 セツコ*広島

初春や九十三歳のめでたさをことほがれおり山茶花に雪

仕舞い終えエプロンはずす時のわれ病みいし頃の母と重なる
土瓶蒸しに松茸がわりのしめじ入れ息子と食す暮れ早き宵
開けるたびすつからかんの郵便受け閉めれば鈍き赤さびの音
しずむ陽にむかいて今日も手を合わす病まず転ばず過ぎしを謝して
藤野 早苗選

スクリーンショット 鈴木 喜代子*愛媛

南寄りに昇る太陽拝しつつ今年も耐えた我が膝さする
欲しい物スクリーンショットで送れと娘そんな技術を持たざるわれに
文字書けぬ祖母の悔しさ思いおり操作不可解携帯電話
お互いに苦労話を小出ししてスマホで繋がる人生の暮れ
もう金に執着なしと言いながら年末ジャンボの列に並びぬ

Ωのかたち 尾花 照子*福岡

冬あかね墓前を掃けば白緑のΩのかたちの石のあらわる
しゃっくりのとまらぬ父をわらう子の車窓にうつる賢島ゆき
終列車さしむ冬至のつり草は夢に夜霧の白樺となる
ひとひらの煙はきだし陸蒸気汽笛をならし地のはてへ消ゆ
待春の七階北の病窓に少年ひとり風をゆらせり

七 草 浜田 敬子 福岡

隣り家の少年の吹くりコーダー日に日に音程整ひてゆく
亡き夫がしてゐたやうに日当りのよい縁に座し本を読むなり

湯上り後亡夫の丹前身につけて「七草なすな」と今宵はたたく
冷蔵庫内の野菜やプランターの野菜を揃へ七草刻む
草取りを三日間して三日後に痛む背中に湿布を五枚

柔 軟 剤 小森田 より子*熊 本

正月に卓に並べるご馳走の料理上手は解凍上手
寄せ鍋かキムチ鍋かを迷う頃インフルエンザ罹患の兆し
冬休み女孫くる日の洗濯にちよつと多めの柔軟剤を
冬の湯にヒートショックの怖ければヒートテックをゆつくりと脱ぐ



水上 比呂美選 「その二集」特選

たこやきの舟 くだう れいん*岩 手

ほんとうにすこし言えないことと思う運転席のくちびるへグミ
煮穴子の下の胡瓜の薄切りの薄さ青さは泣きたさに似て
よーそろー 駅のごみ箱から風に飛ばされてゆくたこやきの舟
へすくにげろ 逆らうな〜看板青く貼られたままの壁を見上げた
記憶とは砂よりも砂利かもしれず碁石海岸引き波に鳴る

掃き終えるそばからひらり銀杏葉は足あとのごと我の後ろに
大 樟 の 腕 福 重 いく子*宮崎

振り出せばオレンジいちごハッカ味きらきら飛び出すサクマドロップス
ぽによぽによと暮らす吾が身の筋力がえいと腰あげ大掃除する
陽に干した布団は雲に乗るこち筋斗雲で越ゆ二〇二四
元日が寂しくつらい日となりし人よさざんか紅く咲きおり
大樟の腕より飛び出すぶらんこで蹴れるくらいに空へ近づく

音色哀しき 山崎俊一*茨城

南天の赤き実尽きてさえずりし鳥の影なく夕日陰ひく
蠟梅の甘き香りに小鳥寄りしきりにつらばみ黄花散りゆく
バイオリンの音色哀しき「神田川」流れ下りてひとり歩きぬ
冬空に浅間映りて浮かびくる藤村の詩「まだあげそめし…」
宇宙とは調べ尋ねてふと思う腸に生れたる菌の一生

白神の森林 善如寺 裕子 群馬

籠もりゐる孫の胸より突き抜けるトランペットの「ハトと少年」

幼さの未だのこれる孫いつかわが目の高さに白き顎見す
ストイックな色と思へど朝焼けに塗れて一羽白鷺立てり
名の寂し(暮坂峠)と牧水の詠みし山の面斑はだれ雪の光る
檜葉組子のスタンド灯せば白神の森林ふかく迷ひこみたり

若がえるわれ

梶原和美*千葉

うれしげに「赤ちゃん生まれた」と男の子前の家より走り来て告ぐ
三人目に妹生まれ兄となる喜びあふれる男の子の瞳

老猫が意味なくおたけびあげる日は側近くいて頭を撫でる
老猫は三月ではや二十二歳ひげが下向き尻尾もやせた
翔猿の勇姿を見たく楽しみに相撲を観ては若がえるわれ

三日月の裏

吉本美加*神奈川

シクラメン蠟燭のごと咲きにけり冬のあしたを小さく照らして
建前が本音の顔をする夜よ芋焼酎をロックでください
ひらいても閉じても見えぬものばかり三日月は裏も明るいかしら
夕方の川崎の水を吸いあげて高野豆腐はふくらんでゆく
寒桜見あげて春の挨拶すスカートの裾少しつまんで

田中 愛子選

会

話

松下誠一*東京

フクロウでさえも迷子になるような真夜中をあなたと目をつむる
オリオン座以外になにか知ってたらもうすこし続いていた会話

白百合がふちから枯れている街のはずれに送電線はたわんで
丈のある草をつたって黄昏の土手をしずかに駆けあがる風
青草の蒸れたたにおいのする橋の柵に凭れていれば日の暮れ

ひとつの家族

松本遊*東京

大海老の背わたを取って串を打ち「ただいま」を聞き焼き始めたり
すき焼きを四人で囲み輪になってこの世でたつたひとつの家族
せりなずな緑ちりばめ香りたち七草がゆが春に点火す
茨城の人が送りし干しいもの箱を開ければ北風匂う
冬の夜の故郷の家の暗がりに七歳のわれ今も泣きおり

二十歳の朝に

三木康史*東京

ガーゼ地の布団の中の柔らかなあと一分の朝に包まる
ポーチュガルオーデコロンの不意打ちで二十歳の朝に呼び戻される
胸骨に猫の重みを受け止める白熱灯よりややあたたかい
温泉のあふれる音の向こうより四十雀の声ツツピと響く
照明を舞台で月の青に変えゼラチンペーパー七十八番

教室

小笠原麻美*新潟

カフェ・オレを一口含み午後からのストレッチサーを柔らかに消す
放課後の笑い溢れる教室に今年の書初め「日向」が並ぶ
南天を飾る鉄瓶の凹凸が今年は蛇のうねりに見えたり
十連休終えて年始の仕事する誰もが菩薩の笑み浮かべおり
土の上やわらにそよぐ草を横し慎ましき河井寛次郎の茶器

ボスのシャツ 川田 ゆかる*大阪

店長は菌茎にくちびるくつついたままの笑顔で接客している
午後いちで大事な話すボスのシャツにぼつんとケチャップのはね
冬空のグレーは鳩と同化する冷たさは人だけを狙って
転んでもただでは起きぬ升かけの相もつわれの握力弱い
インフルやコロナでなくてちよつとした風邪でなんだか申し訳ない

水上 美季選

伯母の筆跡 八木 かおり 奈良

寒風の坂上り来るバスの影一歩出て見る行き先表示
前輪の上、運転士の真うしろの座席が好きでよち登りたり
箱いっぱいのみかんに一つ葉付きあり「お鏡用に」と伯母の筆跡
伯犬の阿形畔形英語ではオープンドマウス・クローズドマウス
穏やかな冬晴れのそら予報士の紹介どほり(寒風)の午後

プレアデス星団 山 添 聖 子*奈良

ほろほると柀の花ほころびて北風は清潔な冬の香
繊細な指揮者のような指先でプレアデス星団を数える
オリオンを子の指がつなぎ終えたととき星はひときわ強く輝く
ドアノブにスーパールの畏のあるクリスマススイブの夜の静けさ
初春のひかり揺らして石段をポニーテールの子は登りゆく

指切りゲンマン 吉村 啓 子*福岡

「クラス会の花バイ」と言う元男子ならばと少しお洒落して行く
補聴器とスマホと鍵は必需品 点呼で確かむ外出の前に
「手袋をとって」と孫は強く言う指切りゲンマン小指と小指
カレンダー最後の一枚眺めつつ経し一年をゆらりとたどる
冬夕陽影のびのびと足長くモデルのつもりで大股歩きす

千人の給食 江越 国 弘 長崎

ベッドにてわんわん泣ける孫抱けばたすかつたといふかほをするなり
ふろしきのごとく飛び来る群れ雀それぞれ秋の樹々に止まれり
我が前を走つた冬猫ペンライト照らせば路地より目玉が見てゐる
シンクに浮かぶ葱に陽が差し美しく千人の給食調理はじまる
扁桃腺腫れたる今日も電話番 かするる声で保護者の声聞く

ハ タ チ 工藤 愛 子*宮崎

五歳児に神経衰弱負けました！覚える速さと忘れる速さ
五歳児とオセロで勝負す白黒が一進一退かろうじて勝つ
震度4立っていられず座り込む能登の被害が頭をよぎる
掃除機を十年ぶりに買い替える軽い、コードレス、売り場キラキラ
気が付けば七十歳の高齢者恥ずかしながら気持ちちはハタチ